

7月7日(日)午前10時から正午まで、本会講堂にて第54回愛知県柔道整復学会・第92回会員研修会が開催され、会員150名と勤務柔道整復師7名が参加した。

藤川副会長の開会の辞に続き、森川会長は挨拶にて、第92回の会員研修会は全国で一番歴史のある会員研修会となっていることを述べたのち、今年4月1日から面接確認委員会がスタートし近々第1号が呼び出されることを述べ、さらに学校カリキュラムの改革と国家試験改革にふれ、「2020年の国家試験から必修問題が30問から50問になり、2022年からは全体の見直しが行われ、200問の問題の新しい改革改正、昨年学校カリキュラムが大幅に改正されていてハードルが一段ずつ高くしている、急激に学校教育が変わっていく」と述べた。

続いて、施術管理者の要件の強化について、「3年間の実務経験、16時間以上の研修がスタートした。これらの事が確実に3年5年10年かけながら、次の世代に送れるような組織改革という事で理解をいただきたい」と述べ、「今日は4題の研究発表、会員研修会ということで、日々の研修で患者さんに良質な施術を提供するという心構えで参加している会員が多いと思う。その積み重ねで患者さんが足を運んでくれると思う。患者さんに安心安全な施術が提供できるような情報が発表を通じて提供される。最後までご協力お願いします」と締めくくった。

愛知県柔道整復学会

1. 足関節内返し捻挫から内果後方部痛が発生した一例

澤田 陽俊会員(半田)

サッカー一部所属の男子高校生が足関節内返し捻挫(前距腓靭帯部損傷)で来院、(既往歴として3ヶ月前に右外果部の骨折あり)捻挫の程度は軽症であったため1週間ほどで部活を再開したところ、足関節内果後方部痛と背屈制限が発生。

内果後方部を通過する腱の滑走不全に由来したものと分析し、後療法は下腿～足関節後方に実施し受傷から7週間で治癒した。

治癒後、文献を調査したところ内果後方部を通過する腱にはケーガー脂肪体(kager's fat pad[KFP]・アキレス腱の深層で長拇指屈筋腱の表層と踵骨近位部の空間を埋める三角形の脂肪体、機械的ストレスから血管や神経を保護する)と呼ばれる組織が隣接していて本症例に関与していた可能性が示唆された。

2. 骨折・脱臼整復シミュレーターの研究開発～肩甲上腕関節運動と肩関節前方烏口下脱臼のシミュレート～

高須 周平会員(刈谷)

骨折・脱臼に対する徒手整復において重要なのは、その手順のみではなく、整復を行った時の骨の動きであると考えられる。しかし骨は、筋・皮膚その他軟部組織に覆われており、整復を行っているときの骨の動きを実際に見ることができない。現在の金属具やゴムで連結された骨模型における関節部の可動性は、ヒトにおける関節運動を正確に再現する事ができない、そのため新たな連結方法(磁石)を用いたシミュレーターを研究開発した結果、肩甲上腕関節の関節運動及び、肩関節烏口下脱臼の動きをスムーズにシミュレートすることができ、発生機序・転移・整復を学習する点で有用である。

3. 舟状骨内側に発生した足部痛～有痛性外脛骨と診断された症例～

赤松 徳浩会員(鶴舞)

舟状骨内側に存在する外脛骨は15%前後の頻度で見られるが、スポーツ活動などによる外傷や運動負荷を契機として、有痛性外脛骨として疼痛を発生することがある。その多くは保存療法が行われているが、長期間痛みを抱えている患者さんに遭遇することもある。

10代女性、2症例に対し、Numeric rating



澤田 陽俊会員(半田)



高須 周平会員(刈谷)



赤松 徳浩会員(鶴舞)

scale (NRS) 検査を行いそれぞれ、7と6だった。微弱電流治療器(アキュスコープ)を用い施術し第1～5中足骨間の背側骨間筋部、母趾外転筋部など、筋肉の圧痛部位を4～5回施術しストレッチをする事で、NRSは0となり良好な結果が得られた。自覚疼痛部位の近傍だけでなく広範囲に注意深く観察し施術をすることが良好な結果につながる事が示唆された。

4. 初期に胸鎖関節後方脱臼と思われたが後に鎖骨近位端骨折が判明した症例の報告

山北 陽一会員(中村)

胸鎖関節脱臼は全脱臼の1%と稀な外傷で、前方脱臼と後方脱臼に分類される。後方脱臼よりも鎖骨近位端骨折(骨端線離開)が発生するという報告が散見されるが、両者の鑑別は臨床症状、画像所見(CT、MRI)では困難とされていて、多くは術中所見で確認されている。

今回、症状により胸鎖関節脱臼を疑い米田病院へ紹介し、CT・MRI検査により胸鎖関節後方脱臼と診断。転移が軽度な為三角巾と鎖骨バンド固定にて経過観察となりその後、超音波画像に変化を観察、患部が不安定な状態と考え包帯固定を追加した。

23日目のMRI検査にて胸鎖関節は整復位にあったが鎖骨近位端部に信号変化を認め鎖骨骨折(近位骨挫傷)と診断された。

鎖骨の骨端線閉鎖以前の年齢では脱臼よりも骨折(骨端線離開)が発生する可能性があることを理解しなければいけない。



山北 陽一会員(中村)

会員研修会

11時10分から第92回会員研修会が、「上肢軟部損傷に対する固定～固定法・固定具の紹介～」と題し開催された。

永田 和平会員(岡崎)が、「ワンフィンガーナックル固定～早期可動域訓練と手指掌側の固有感覚を早期から再構築する目的の固定～」と題して発表した。

まず、掌側板の運動と神経について解説し、掌側の構造物周辺の癒着が原因で拘縮しやすい場所のためできるだけ早く可動域訓練をすることで、良好な経過が得られることから、可動域訓練のできるプライトンとマジックテープを用いた、PIP関節掌側板損傷に対する固定方法を紹介した。

山本 和成会員(豊橋)が、宮坂 智也会員(豊橋)と共に、「救護現場でヘアピンを用いた指関節捻挫の固定法、ドライヤーで整形できるキャスト材での固定法」を実演紹介した。当初発表予定だった源田 実会員は入院中のため、山本会員が代役を勤めた。

森 正仁会員(半田)が、「自作したミッドドルフ三角副子一番線を利用した肩外転固定具～」と題し、アルミ製番線(3～4mmホームセンターで購入可能)を使用した、安価に作成できる肩関節固定用装具の作成法を紹介した。

(広報部)



永田 和平会員(岡崎)



山本 和成会員(豊橋)



宮坂 智也会員(豊橋)



森 正仁会員(半田)



7月7日(日)午後2時から午後4時50分まで東海役員合同協議会に47名の役員が参加し、本会講堂にて開催された。

はじめに、服部 和人三重県副会長の司会進行にて昨年度の物故者(岐阜県 細野 勝己柔道部長・愛知県 長谷川 貴一副会長)に対して黙祷が奉げられたのち、伊藤 宣人三重県会長の開会の辞で始まり、続いて本年度より東海ブロック会会長を務める鹿野 道郎岐阜県会長が挨拶を述べた。

本年度は、次の三つの協議事項について各県の取り組みが報告された。

- ①組織率向上対策について
- ②各県の面接確認委員会進捗状況について
- ③各県の違法広告に関する活動について

まず初めに愛知県から藤川副会長が、続いて静岡県からは小澤 喜一会長が、3番目には岐阜県から杉江 拓郎副会長、最後に三重県から内藤将善学術部長が報告したのち質疑応答があり、

最後にその他として日整の活動状況について森川 伸治日整学術教育部担当理事・伊藤 宣人日整保険部長が答えた。

その後、静岡県の岩澤 勇治事業部長が7月21日(日)に開催される第38回日整東海ブロック柔道大会・第16回柔整師杯東海少年柔道選手権大会・第9回東海少年柔道形競技会(藤枝市静岡県武道館)について詳細を述べ、各県に協力を依頼し締めくくった。

(広報部)



第16回柔整師杯東海少年柔道選手権大会 第9回東海少年柔道形競技会 第38回日整東海ブロック会柔道大会

7/21

7月21日(日)午後12時30分より午後4時まで、静岡県藤枝市の静岡県武道館にて開催された。この日は、曇天で蒸し暑い日であった。

開会式では、始めに開会宣言を春日井 和幸柔道部長が岩澤 勇治静岡県事業部長(選手として出場のため)に代わって行った。国歌斉唱、優勝旗返還、レプリカ贈呈と続き、次に東海ブロック会柔道大会表彰として日整全国柔道大会5回以上出場選手として愛知県は、森 正仁・羽田野剛の両会員が表彰された。東海ブロック会会長鹿野 道郎岐阜県会長が挨拶し、出席者に謝辞を述べるとともに選手に対しては、ケガの無いようにと結んだ。最後に来賓あいさつがあり試合へと進んだ。

少年柔道選手権大会は今年から団体戦のみとなり、各県選抜された5人の少年少女が活躍した。また、女子の3人での団体戦も行われた。このため今回の大会は、かなり時間が短縮された。少年5人の団体戦、女子3人の団体戦、い

ずれも愛知県チームが優勝を飾った。会員の大会は3位となった。この会員大会では、2回戦で2選手が負傷しそのうちの一人が棄権したため、最終3回戦は4人で戦うこととなった。

東海東部チームとして、愛知県から監督として春日井 和幸柔道部長が、選手として下山 徳大・浅井 友哉の両会員が選ばれた。優秀選手として愛知県からは、下地 琉仁選手(少年団体)、榊原 佑月選手(女子団体)、下山 徳大選手(会員団体)が選ばれた。

今大会は、女子3人の団体戦から始まり、少年の団体戦、会員の団体戦の順に行われ、2回戦すべてが終わったところで少年柔道形競技会が行われ愛知県代表ペアが優勝した。森監督は、「6月の大会で優勝してから、本日の大会で優勝し、全国大会へ出場が決まったことにより、このひと月あまりの緊張がとけ、ほっとしている」、「これから夏休みを返上し全国大会に向け研鑽を積む」と述べた。

古市 博己三重県柔道部長が閉会宣言を行ったのち、来年の大会開催日・会場の発表をした。
令和2年7月26日(日)・三重県津市のサオリーナ(サブアリーナ・三重武道館)

(広報部)



愛知県の選手



少年形



日整ブロック会柔道大会愛知県チーム



日整全国大会出場者

第16回柔整師杯東海少年柔道選手権大会

優勝 女子団体

先鋒：伊藤 杏(4年生)
中堅：嶋田 真佑美(5年生)
大将：榊原 佑月(6年生)
監督：月野 義明

優勝 選抜団体

先鋒：下地 琉仁(4年生)
次鋒：諸橋 琥太郎(5年生)
中堅：山口 楽斗(5年生)
副将：黒野 琢磨(6年生)
大将：濟木 恒栄(6年生)
監督：羽田野 剛

第9回東海少年柔道形競技会

優勝

(取)：相川 源(武豊柔道教室)
(受)：牧園 翔大(武豊柔道教室)

第38回日整東海ブロック会柔道大会

優勝：静岡県 2位：岐阜県
3位：愛知県 4位：三重県

愛知県チーム

監督：春日井 和幸
先鋒：下山 徳大(優秀選手)
次鋒：浅井 友哉
中堅：河邊 俊博
副将：間瀬 吉晃
大将：月野 義明
愛知県 対 三重県 2 - 1 愛知県
愛知県 対 岐阜県 2 - 3 岐阜県
愛知県 対 静岡県 2 - 3 静岡県

日整全国柔道大会出場者

監督：春日井 和幸
先鋒：下山 徳大(愛知県)
次鋒：梅原 拓実(静岡県)
中堅：浅井 友哉(愛知県)
副将：吉田 卓実(静岡県)
大将：岩澤 勇治(静岡県)

第54回東海学術大会 愛知大会

11/17

11月17日(日)午前10時から午後4時まで、ウインクあいちにて、第54回東海学術大会 愛知大会が行われ、625名(本会会員163名)、日整介護セミナーに171名(本会会員103名)が参加した。

藤川 和秀副会長の開会の辞の後、公益社団法人日本柔道整復師会の工藤 鉄男会長が、来年開催される東京オリンピックに対しての日本柔道

整復師会の取り組みについて述べられ、「参加する柔道整復師はしっかりと研修と講習を受けて技術を提供できなければならない、そう言う意味でも11地区で開催されているこの学会にどれだけ参加したかも参考になる」と挨拶された。

続いて森川 伸治会長は挨拶にて「令和初の学術大会を愛知で開催できる事を感謝します」、「本学会は、昭和41年より中部接骨学会の主催

者米田柔整、当時の中部柔整専門学校の協力のもと中部接骨学会と当時の東海接骨師会との共同開催と言う事で発足し、昭和53年には東海接骨学会と改称、平成21年からは公益社団法人日本柔道整復師会主催の東海学術大会となり、発足以来通算で54回目を迎えることができた」と東海学術大会の歴史を述べた後、「歴史ある学会として運営できますのも会員の皆様方、中部接骨学会、東海地区のみなさま方からの温かいご支援ご協力の賜物」と謝意を表され、「公開講座では来年の東京オリンピックをひかえ、スポーツに対する関心が高まる中、多くの学校関係者、スポーツ指導者、県民の皆様幅広く参加いただけるよう、より安全に活動していただくために東海大学体育学部武道学科教授の宮崎誠司先生に講演していただく」とこの後行われる県民公開講座の紹介をした。

10時30分から12時まで大ホールにて、第13回県民公開講座が開催され、『おもてに見えないスポーツの安全対策』-柔道大会や活動を安全に運営する取り組みと期待-と題し、宮崎 誠司先生が講演された。

宮崎先生は、冒頭「平成23年にスポーツ振興法の改正により、スポーツ基本法が制定され、そこにスポーツ事故の防止等という項目ができ、安全を確保する知識の普及その他の必要な措置をやらなければいけないという事になった。柔道はケガが多い、エビデンスが重要だという事になった、それによってどうして行くかをお伝えするというよりも皆さんと一緒に考えて行けたらと思う」と講演を始められた。

つづいて「死亡例は減ったが、未だに毎年いろんな事故は起きている。重大な事故の中では、頭のケガが全体の半分くらい、頸のケガもそれに準じたくらいあり、後は運動中に突然起きる心臓の問題がある。頭は死亡例が多い、頸は死亡例はほとんど無いが、心臓疾患で亡くなっている多くの方は、体格の良い方で心筋梗塞など

で亡くなっている。

こういうデータがある中で、頭のケガ、頸のケガ、心臓の突然死があるような病気をケアしていかなければならない、手足のケガも多いが重大な事故をどう防ぐかどう対応して行くかが大事」と述べられた。

データによって対策が立てられるようになってきたこと。救護現場の現状や、救護に当たっての心構えなどを述べられ、最後に「柔道は安全かといえば、絶対安全とは言えない。リスクがあることを分かった上で、しょうがないと言うのではなく、減らす努力をしながら、起こったときに対応する。

心臓への対処、頸椎や頭への対応、こういうものを、みなで共通した理解と共通した技術・技能を持ったうえで、やっていくと言うのが今後の柔道界。もっと言えばスポーツ界に必要なことではないかと考える。

今こういう事を考えながら、オリンピックに対して、オリンピックの組織委員会含め、連盟も動いている。われわれも何を準備して何を学ばなければいけないかという事が少しでもお分かりいただければと思います」と述べられ講演を終えた。

昼休み後の13時からは、同じくA会場(大ホール)で、8題の会員研究発表があり、本会からは、和家 博明会員(笠寺)が、「長期化した足底腱膜損傷に対する足底板装具療法の有効性について」と題して発表した。長期に亘って踵部の強い歩行痛や骨棘を伴った患者に対して、オルフィットのハードを使用した自作足底装具の作成過程から、装着法の解説もした。通常ならば、シリコン素材等の軟らかい素材の物を使用することが多いが、今回のように硬質素材で足底から側面まで履物のように足全体を覆い、足にフィットさせ、尚且つ骨棘などの圧痛部分に穴を開けることで直接圧力が加わらないようにした装具の有用性を述べた。



藤川 和秀副会長



工藤 鉄男日整会長



森川 伸治会長



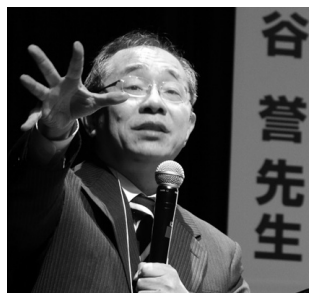
宮崎 誠司先生

14時半からは同じくA会場で、日整介護セミナーとして「柔道整復師の地域包括ケアシステムへの関わり方～2019 新たな地域貢献への挑戦～」と題し、日整特別諮問委員の三谷 誉先生が講演された。

日々年々変わっていく地域包括ケアシステムへの関わりとして、今回「フレイル」という言葉に着目した。フレイルとは？『高齢期に生理的予備機能が低下することでストレスに対する脆弱性が亢進し、生活機能障害、要介護状態、死亡などの転機に陥りやすい状態』とし、介護予防の「集いの場」に専門家を配置して、高齢者同士のコミュニケーションや関係を作り、フレ



和家 博明会員(笠寺)



三谷 誉先生

イル対策を目指しているとされている。この「集いの場」への我々の関わりが、これからの柔道整復師の活動の場を広げることになるやも、と述べられた。

この同時刻13時半から15時までB会場の小ホールでは学生による5題の口頭発表があり、15時半からは発表された会員、学生の表彰式があり、16時には次回の主管県である岐阜県の鹿野 道郎会長の閉会の辞をもって全ての行程が終了した。

尚、今回は令和3年の開催となる。

(広報部)



寛 芳幸 学術部長・宮脇 雄祐 岐阜県学術部長

第28回日本柔道整復接骨医学会学術大会

11/23・24

11月23日(土・祝)と24日(日)の2日間にわたり、東京湾近郊の有明に立地する東京有明医療大学において開催された。田渕整形外科クリニックの田渕 健一先生の大会会長講演をはじめ、特別講演、シンポジウムなどがA会場(HANADA HALL)にて行われた。

田渕 健一先生は大会会長講演の中で、足部の第4、5趾長趾伸筋と第3腓骨筋はS1の神経に支配されているため、第4趾の長趾伸筋が弱いと第3腓骨筋も弱く足を外返りする力も弱くなるため捻挫をしやすくなる。捻挫のしやすさは第3腓骨筋の筋力低下を診断できなくても、第4趾の長趾伸筋の筋力低下を証明することで推測できると述べた。また、足関節の捻挫ぐせの原因に靭帯の機能不全があるが、前距腓靭帯は関節内靭帯で修復しがたい、就寝時の蒲団による尖足や、踵による突き上げで寝ている間に悪くなる。つまりNight Positionの指導が大切であると述べた。

その他、実践スポーツ医科学セミナー2講、国際セッションをはじめ各分科会によるフォーラム8講、ランチオンセミナー、

実技発表：固定法2講・手技療法1講、口頭発表40講、ポスター発表6講がそれぞれの科目別に7会場で行われた。愛知県からは、熱田支部の山岸 裕幸会員、そして本会会員の三谷 誉会員、渡辺 正哉会員の発表が行われた。各会場では活発な議論が行われ2日間でのべ2,022名の参加があり盛会のうちに無事終了した。

来年度は令和2年11月14日(土)、15日(日)に東池袋の帝京平成大学での開催が予定されている。

(学術部長 寛 芳幸)

